秋の七草

萩が花、尾花、葛花、撫子の花、女郎花、また藤袴、朝顔の花の七種が万葉の時代に山上憶良が詠んだ秋の七草である。ここに出てくる朝顔は桔梗であろうといわれている。当時は朝咲く美しい花のことを総称して、あさがおといい、その意味で、秋の朝早く横向きに咲く桔梗もまたあさがおといえる。現在の植物名では、ハギ、ススキ、クズ、ナデシコ、オミナエシ、フジバカマ、キキョウが秋の七草である。暦の上では立秋は八月七日頃であるが、この頃高温のピークに達し、暑さが峠を越す時期に風のそよぎ、雲の色や形から素早く季節の変り目をよみとり、この時期の野原の状況から雑然と選ばれたのであろう。

秋草を活けかへて
又秋草を
山口青邨

藤までの秋の七草
分けすすむ
鷹羽狩行

ハギの根は一説にはめまいやのぼせ、ススキの根は利尿・解熱に効果があるといわれており、秋の七草はすべて薬効があるということになる。

葛の花

晩夏から初秋の頃まで、花穂の元から咲いて落花し、しだいに咲きのぼる。豆の花に似た赤紫の蝶形花で、両側の翼弁の色はとくに濃い。大きな葉に隠れがちであるが、藤に似て美しい花である。紫の落花が小径に降りしいたのなどとくに美しい。

ちか道は沢深みかも
葛の花
楠田橙黄子

葛は古くから重要な食料として利用されてきた。葛湯や葛餅にするほか、若芽や若葉をゆでてあえ物にしたり、花を酢のものにしてもおいしい。食用の他、茎の繊維は織って葛布に、葉は家畜の飼料としても利用されている。

根は冬採取したものが最もデンプンに富み薬効も勝っている。クズのデンプンは良質でクズ粉として市販されているから家庭に常備しておくとよい。かぜひいた時とか病後の滋養にクズ湯として利用するとよい。クズ湯は、クズ粉に水と砂糖を加え、とろ火でかきまぜながら作る。熱いのを飲むと元気が出て、治りが早い。かぜ薬としては漢方の葛根湯が有名である。暦の上では立秋は八月七日頃であるが、この頃高温のピークに達し、暑さが峠を越す時期に風のそよぎ、雲の色や形から素早く季節の変り目をよみとり、この時期の野原の状況から雑然と選ばれたのであろう。

ナデシコ

川原に多い多年生草木で草丈は50cm内外で夏から秋にかけて、花弁の縁が糸状になっているいかにもデリケートな、薄紅色のかれんな花を咲かせる。子供の頭を撫でるような悲しみの心を引き出すところから撫子（なでしこ）と名付けられたという。属名はギリシャ語で「神の花」の意味。和名はカワラナデシコ。またやまとなでしこともいう。清少納言は「草の花はなでしこ」とまで言い切っている。

露の世や露のなでしこ
小なでしこ
一茶

民間薬としては、乾燥させた種子10gほどを一日量として煎じて飲むと、利尿効果があり、むくみ、膀胱炎、尿道炎によい。また、晩秋のころに根茎、葉を陰干しにして刻んだものを一にぎりほど絹の袋に入れ、水2ℓほどで半量になるまで煎じて6回に分けて飲むと尿の出をよくする。

女郎花（おみなえし）

日当たりのいい日本各地の山野に自生し、直立し、高さは1mほど。8～10月頃、茎の先に、粟粒のような黄色い小さな花をたくさん咲かせる。白い花を咲かせるオトコエシによく似ているが、オトコエシより草姿がやさしいので、女性にたとえて名づけられたという。オミナは女（娘）の意で、エシは「なるべし」の略されたものといわれ、しっとりとした草姿からの名である。秋草の代表として枕草子、源氏物語、紫式部日記などに登場する。

若苗、若葉はあえ物、煮物にして食べられていた。

漢方では根を敗醤根といい、はれ物、解毒、利尿に利用される。根を11月頃採取して洗って日光干にする。排膿、浮腫、婦人病（浄血、過経、こしけ）に敗醤根6～10gを水500mlで煎じ一日3回に分服する。

藤袴（ふじばかま）

西日本、朝鮮半島、中国など東南アジアの暖地の河岸の草地などに自生する。奈良時代以前に薬草として渡来した。高さ1～1.5m。8～9月頃、茎頂に淡紅色の小さな花を密に咲かせる。紅紫色の花の色を藤の花にたとえ、袴は「帯びる」、身につける意味から名づけられたという。別名はこめばな、かおりぐさ、こうすいらん。中国での別名は香草で、半乾きのときに芳香を放つことに由来。昔、武士が兜（かぶと）の中にフジバカマの葉を忍ばせて、討ち死にのときの身だしなみにしたという。また葉茎を布袋に入れ、衣服といっしょにおさめて、その佳香を移したともいわれている。

思ひびとふと声に
出づ藤袴
永方袴子

藤袴この夕ぐれの
しめりかな
園女

漢名は蘭草という。まだつぼみのままの花もついている頃の全草を刈りとり、2～3日天日乾燥し香りが出たら、風通しのよいところで陰干しする。

浄血、通経、解熱、鎮痛に一日量3～10gを煎じて3回に分けて飲む。

皮膚のかゆみには、乾燥し切ったものを、布袋に入れて煮出し、袋ごと浴湯料として用いる。袋ごとするとなお効果的。

桔　梗

紫のふっとふくらむ
ききやうかな
正岡子規

「桔梗や咲くときぽんといひそうな」秋の野辺に乱れ咲く七草のうちで桔梗の紫は色鮮やかで凛とした美しさはひときわ目だつ。万葉の時代から詩歌に詠われ愛されてきた秋草の代表。日本全土、中国、朝鮮半島などに分布する。山野の日当たりのよい草地などに自生し、八～九月頃紫碧色の五裂の美しい花を開く。桔梗は漢名で古くはこれを「きちかう」と読み、キキョウはその転訛したものといわれている。

桔梗色という色名があるが島崎藤村の千曲川スケッチの中に「遠い山山まで桔梗色に顕はれた」という描写があるが、ひとごころを鎮める色であろう。

修行者の径にめづる
ききょうかな
蕪村

桔梗やおのれ惜しめと
いふことぞ
森澄雄

月に供ふうふ
むらさきの山桔梗
きくち

薬用としては根を使用する。秋に根を採取して竹のヘラで皮をはぎ、天日乾燥して用いる。漢方では桔梗の根のコルク層をはいで乾かしたものを桔梗根、晒桔梗といい、鎮咳、去痰、排膿の薬効で用いられている。桔梗湯、小柴胡湯加桔梗石膏、十味敗毒湯、排膿散、清肺湯、防風通聖散など多くの漢方薬に配合されている。

桔梗湯の作り方は桔梗2g、甘草3gを水100mlで煎じて一日3回に分けて温服する。これは咽喉がはれて痛むもの、咳が出て粘っこい痰や血が交ざるものによい。扁桃腺炎などにもよい。

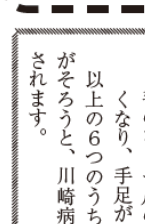
扁桃炎、のどの痛みに、根10gを刻んで270mlの水で煎じて180mlまで煮つめ、この煎汁で何回もうがいする。またこの煎汁を少しずつ何回にも飲用する。

百日咳、5才以上は一日根6gを煎じて飲ませる。4才以下の幼児はこの半量を用いる。飲みにくければハチミツを加えてもよい。

養正会薬局　（鍵山）

知っていますか？ おばあちゃんの知恵

此の歳になりますと、駅の階段をのぼるのもつらうございます。しかし弱っているのは足だけではなく、ビルの階段を二、三階分上がっただけで、心臓がドキドキして、途中で休まずにいられない方もみうけられます。専門医の検査をうけ、指示に従うことが必要ですが、補助療法として、卵の油をおすすめいたします。作り方は、卵を白身と黄身に分け、黄身だけをフライパンに入れ、弱火でかき混ぜながら炒ります。黄身が真っ黒になるまで炒るとタール状の油がでてきます。飲む時は杯に水を入れ、卵の油を二、三滴落として、一日二回飲みます。



薬剤師　高木　丈夫

こどもの病気シリーズ

川崎病

1967年、川崎富作博士により報告された、全身の血管炎を主体とする病気で、皮疹、粘膜症状、リンパ節腫大を伴うため、粘膜皮膚リンパ節症候群とも呼ばれます。原因はよくわかっていませんが、4歳以下のこどもに多く、特に1歳前後の発症が一番多いのも特徴です。年々増加傾向にあり、最近では、年間50000人の患児が新たに報告されています。この病気は、心臓に合併症（冠動脈瘤）を起こし、時には大事に至ることもありますが、最近は心臓合併症の診断・治療の進歩により、死亡率は減少しているので、早期の治療が望まれます。

〈症　状〉

始めは発熱の他に、咳や鼻水が出て、風邪と区別できないこともありますが、やがて次のような症状が出てきます。

1、39から40度の高熱が、5～14日くらい続く
2、発熱から2、3日たった頃に、全身に大小様々な赤い発疹が出る
3、首のリンパ節が腫れて痛む
4、唇や口の中が赤くなり、舌がいちごのように赤くぶつぶつと腫れる
5、目が充血する
6、手のひらや足の裏が赤くなり、手足がむくむ

以上の6つのうち、5つがそろうと、川崎病と診断されます。

熱はたいていの場合、2週間以内には下がりますが、そのころに手足の指の先から皮がむけてきます。

〈ケ　ア〉

1歳前後の赤ちゃんに原因不明の高熱が出て唇や口・眼が赤くなったときは、必ず診察を受けましょう。川崎病は、原因は分からなくても、検査法も治療法も確立しています。診断さえつけば、以前ほど怖い病気ではなくなりました。

川崎病の診断が下ると、3週間前後の入院医療を受けることになります。なお、合併症は、心臓に酸素や栄養を送る冠動脈に冠動脈瘤という瘤が出来ることです。この中で血が固まって、血管がふさがると、心筋梗塞を起こし、命にかかわります。川崎病にかかったこどもの10%位に、冠動脈の異常が見られるといわれます。発病7日以内に、γ－グロブリン大量療法（点滴注射で5日間）を行うと、冠動脈瘤の発生率を減らすことが出来るので、広く行われるようになりました。また血栓を予防するため、アスピリンを内服したりもします。症状が消えた後も、定期的に心臓の検査をしたり、薬を飲み続けたりする必要がある場合もあります。

養正会薬局　薬剤部